

## 四百三十個で支える笑顔

高岡市立伏木中学校 一年 東 瑛那

今年の五月に弟が産まれた。弟はかわいい。見ていてもあきないどころか、ほんわかと幸せな気持ちになる。日本では少子化が進み、高齢者が増えてきている。でも我が家は四人兄弟になった。毎日にぎやかに楽しく暮らしている。

今、世界の人口は七十一億人を超え、一分に百三十七人、一日に二十万人、一年で七千万人も増えている。日本の少子高齢化とは違っていた。世界中で一年間に、一億三千万人の赤ちゃんが産まれているのに、一年で命を落としてしまう赤ちゃんも数多くいるということにはとても驚いた。せつかく産まれてきたのに、

生きられないなんて悲しすぎる。私はどうして生きていけないのだろうと考え、調べてみた。

世界の国々では、貧富の差の拡大、温暖化などの問題、石油の枯渇が近づき、表土と森が失われている。水や食料が不足し、食べ物にも困る人が多くいる。私たちが当たり前のように通っている学校や病院の多くも、他の国では足りていない。そんな様々なことが重なって、今の人口が動いている。

私は弟が産まれるまで、そんなことを考えたこともなかった。自分が産まれて育ってきたことを深く考えたこともなかった。でも、弟の存在が、私に考えるきっかけをくれた。

私の通う中学校では、ペットボトルのキャップを集めている。ペットボトルのキャップは、約四百二十個で、一回分のワクチン代になる。ポリオワクチンは、その二倍の量が必要になる。毎日飲んでいるジュースのキャップを集めるだけで、世界のどこかの子どもの命を救うことができる。

弟が生まれたことで世界の子どもたちに関心をもつようになる前の私は、そんな活動をしていることに興味もなく、私がやらなくても誰かがやればいいだろうと思っていた。キャップを集めるといっても簡単なことを、面倒くさいと思っ

ていた。でも、誰でもできるこの活動を通して、世界の未来や子どもの命を考えた  
り、限られた資源を有効に活用することができたらいいと思えるようになった。

私はこの夏休み、ペットボトルのキャップを集めた。私にできることを始めた  
のだ。私の行動はとてもささやかなものだ。でもこのささやかな行動が、世界のど  
こかで生まれただれかの生命を支え、どこかの小さな子どもの笑顔につながると  
思うと、うれしくなる。私と同じように、小さな子どもの笑顔を見つめる幸せな  
家族が、世界中にたくさん増える未来が来るように、私もできることから関わっ  
ていきたいと思う。